
Le Monde Creatif

荒ぶる長官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Le Monde Créatif

【NZコード】

N9030V

【作者名】

荒ぶる長官

【あらすじ】

主人公東雲武人は私立双葉高校の2年生。小さい頃に負った怪我が原因で車椅子生活を強いられていたため、学校以外ではMMORPG「Le Monde Créatifオンライン」という超人気のネトゲ漬けの生活を送っていた。

そんなある日。いつものように学校で授業を受けていると、グラウンドで大きな爆発音が。慌てる生徒達。何があつたのかと外を見ると・・・そこにはいるのは大量の魔物だった。

そんな中、武人の頭の中にある言葉が脳裏に浮かぶ。パニクつていた武人はその言葉を叫びまさかの変身を遂げてしまつ。しかも、その姿は . . .

口常と転校生（前書き）

初めましてお客人。

まずは本編を読んでもらってから説明に入ることにしよう。

馴文ではありけれど、宜しくお願ひするよ。

日常と転校生

もう何時間経つただろうか。

倒しても倒しても湧き出てくる敵。俺はそれを幾度と無く切り刻んでいく。

村を襲つた魔物に奪われたといつ秘宝は誰が持つているのだろうか。もしかしたらここにはもう居ないのかもしれない。そろそろ場所を移動しよう。そう思った時だった。

「・・・ツ！」

今まで見たこともないような大きな敵。今まで倒してきた奴らとは何かが違っていた。

地面上に叩きつけられるような威圧感がこの荒野」と支配する。

だが、それに負ける訳にはいかない。

俺は両手でしっかりと握りしめた「青龍」を構え、堂々と向かう。村を襲つたのは間違いないことだらう。

「さあ、大人しくなつてもうおつか」・・・

俺は大きく一步踏み出し、剣を縦に振り下ろす。

勿論、この距離では直接攻撃を当てるとは出来ない。

しかし、その振り下ろした剣の軌道に沿つて青い光が見える。

そして、その光は敵を田掛けてまっすぐに飛んでいた！

ザシュツ！

魔物の雄たけびが聞こえる。荒野には魔物のモノと思われる緑色の血流が飛び散つていた。

勿論、親玉はその攻撃だけで死ぬなんてことはない。

再び起き上がり、今度はこちらに向かって飛びかかる。

そして剣を我武者羅に振り回す！！

「・・・クツ」

間一髪で交わすものの、一部の攻撃は受けてしまったようだ。

頬がジリジリと熱くなる。きっと剣の先が当たってしまったのだろう。

しかし、それ程ダメージのある攻撃ではない。背後を取った今なら勝てる！

「爆・・・碎ツ！」

俺は体長よりもずっと大きい大剣をそのまま敵の脳天に振り下ろす。

そして、

「終わりだッ！」

強大な爆風と友に、魔物の親玉は姿を消した。さつきまで戦っていたのはその子分達だったのだろう。

親玉が負けたと氣づくと、素早くその場から逃げ出していた。

「倒したか・・・。」

足元を見ると、紅く光る宝石が落ちていた。

「コレが秘宝か。」

手に持つてみると想像よりも軽く、小さくものである」と驚いた。

「秘宝ってこんなちやっちはものだつたんだな（汗）

まあ、よくあることだ。他人からみたらどんなにくだらなく見えてしまおうと、その人たちにとつては大切なものである。

それを笑うこと、踏みにじること。それはなによりしてはいけないことだ。

俺は荒野を後にして村へと向かった。

村へ・・・とはいえ、この荒野の先にある谷を抜けたらすぐそこへあり、たいした距離ではない。

「よし、さつさと戻つてクエストをクリアしよう . . . ん？」

荒野を出て村の方角へ移動すると、一人の少女が魔物と戦っていた。
新人だろ？か。魔物の規則性のある攻撃に食らいつくので精一杯の
ようだった。

「えいっ！やあ！！」

杖を持つている辺り、魔法使いだろ？。

しかし、動きがぎこちなく、魔物達にジリジリと詰め寄られていく。

「あ、あいつは！！」

その詰め寄られる先に死神が大きな鎌を持って構えているのを俺は
見逃さなかった。

村の近くに沸いては狩り、消えては移動するといつやつかいな魔物
だ。

本来、他人の狩りを邪魔するのはマナーに反するのだが . . .

流石に助けないとまずいだろ？な。

俺は彼女が戦っている谷底へと飛び降りた！！

「友達に勧めて魔法使いになつてみたけど・・・

魔法使いにきつと向いてるよ。なんて言葉、信じなければよかつた。

発動までの時間に動かれたら攻撃は当てこくいし、なにより。

「ナマが切れたらビリジョウもないじゃない！――

なんて言つても拉致があかない。少し待つては火を出す呪文で魔物を焼き払う。

村の近くで練習・・・のつもりできたのに、気づいたらこんな奥まできてしまつて、いる自分を呪つた。

しかし、それも今更。体力もどんどん削られてきた。マナは今使つてしまつてすぐに魔法は使えない。

「グヘヘ・・・」

「・・・ツ！」

後ろから死神の笑い声が聞こえるじゃない！

どうしよう・・・前の敵を見るので精一杯なのに、後ろから鎌で攻撃されたら・・・

もう・・・ダメッ！

「てりやー。」

「グゲゲ・・・ウガアツ！！」

「えつ！？」

いきなり死神のうめき声が聞こえて後ろを振り返る。するとそこには。

「大丈夫か？」

体よりも大きな剣を持った剣士様がいた。

「あの、あなたは・・・」

「クエスト中に通りかかっただけだ。」

その人は、一息つくと、私を襲っていた魔物の目の前に立ち

「とりあえず、体力無いみたいだし、こいつら倒していいか？」

私はただ呆然として、

「お願い・・・します・・・」

と呴いた。今の体力、能力で倒せるわけも無かつた。おそらく狩りのマナーを気にしてのコトだったのだろう。

とにかく、いい人には会えて助かつた。

その人はわずか数分で、その辺りの敵を一掃したのだった。

私はただその人を見ていた。

背中には大剣。両脇に双剣を抱えていた。その場の戦いに合わせて2つの武器を使い分けているのだろう。

なんとも頼もしくて、気づいたら見とれていた。自分も職種は違えども、こんな風になれたら。

「とりあえず、一緒に村まで行こうか？護衛するよ。」

「は、はい／＼」

私は言葉につまらせながらも即答していました。

少し寄り道してしまったが、村へと向かう。いつも単独で行動していたこともあり、今はとても不自然な感じがした。

しかも女性だ。少し落ち着かないのは当然だろう。今まで数人と行動したこと也有つたが、女性と絡んだ記憶は一度しかない。

流れで護衛を申し出てみたのだが、やっぱりこちなかつただろうか？

そんな不安があつたのだが。谷と村は田と鼻の先。すぐに村へ着いた。

「さあ、着いたよ。」

「あ、ありがとうございます。」

普通にお礼を言われた。変な風に思われなかつたよつで安心した。

「えじや、俺はこれで。」

今回のクエストを終えるため、村長のいる場所へ向かおうとした。

「待つてくださいー。」

「え？」

護衛をした女性に声をかけられ不意に足を止める。俺はゆっくりと彼女の方へと向き直る。

何か失礼なことでもしてしまったのだろうか。

「私と、友達になつてくださいー。」

その後に続いた言葉は俺にとつて余りに衝撃的だったけど。

一期一会とも言つだらひ、コレは友達の少ない俺にとつてもいい機会かもしれない。

「俺でよければ、宜しくお願ひするよ。」

こいつで、俺はSA HOと友達になった。挨拶する度友達増えるね。

プリンシ

俺は部屋のパソコンを切るとそのままベットへと移動する。昔の事故から足を悪くした俺は、デスクからベットの移動すら松葉杖。

学校など、外出するときは車椅子を利用している。

だから、昔からインドアなゲームばかりやってることもあり、よくひりひりといったゲームをしている。

「ふあああああ……もう1時か。」

そろそろ寝ないと明日いじ校に遅刻してしまつ。やんわり寝よつ。体も疲れていたらしく、意識は直ぐに遠のいていった……。

世界。

世界とは誰が”やつやつ”したのだろうか。

どうしてこんな世界になってしまったのか、それは誰にも分からない。

全ては物理だの科学だの。法則があつて、常にそれに沿つた動きしかしない。

それは誰かが考えたことではなく、あらかじめ決まつていたコードだ。
もしかしたら、視点を変えたら法則すら別の見方が出来るのかもしれない。

けど、

それを当たり前に突きつけられている世界ではそれを覆す手段はない。

そんな世界で言える事は一つ。

この決まりがある世界の中で俺達は暮らしていくといけないと
言つ事だ。

雲一つ見えない清々しい朝。今日も一日頑張つて過ごさう。そう思った時、バタバタと俺の部屋に駆け寄つてくる音がする。

これも見慣れたいつもの光景。今日は目を覚ましている俺の勝ちだ。

「はやく起きなさいって、武人！」

ノックのされないドアが勢いよく開いた。開いた先にはよく見知つたお馴染みの顔が会つた。

「これが、もう起きてたりするんだよな。」

5分5分で起きてたり起きてなかつたりするわけだが、今日は圧勝だった。

母さんに聞くと、中々起きない時は色々と悪戯をされてくるとかいな
いとか。

それを聞いてからは勝ち越していくよいつな気がする。

「なんだ、今日も起きてたんだー。つまらないなー。」

「つまらないなら毎朝毎朝来なくたっていいだらうじ。」

ちよつと皮肉氣味言つてみたのだが、飛鳥それに全く氣づかないか
のよひに

「武人、おはよつ。」

「ああ、おはよつ、飛鳥。」

今日の朝にマッチしてくる鮮やかな挨拶だった。

飛鳥とは、同じ幼稚園に入園して以来の幼馴染だった。

小さい頃は俺達男の遊びについて行つては泣き出しそうになつながら
こやこやとついて來ていたのが印象的だ。

その甲斐あつてか、今では元気に活発な女の子だ。

俺が車椅子生活になつた頃から、助けて貰つてはいる。幼馴染のよし
みとはいゝ、本当にありがたい。

背も俺よつ若干低いくらいで女子の中ではそこそこ高く、テニス
部で活躍する姿から同級生から男女問わずに人気だとか。

そんな彼女と一緒に生活は決して居心地悪いものではない……のだが。

「わあ、朝一はんも出来てるよ。」

「・・・。」

俺の両親は共働きしていくべく家を空けることがある。それも自分の治療費の借金などが原因なのかと思うと少し気が重い。

そんなわけで、母が居ない日はととき朝食を作ってくれるのだが

「見るもの全てが真っ黒……なのさ、なんでなのでしょうか、飛鳥さん？」

「きっとゲームのやりすぎで暗黒の世界へ招待されたんじゃない？」

んなこたあないわ、さすがに。ニートもどり皿の警備という実に過酷な職業に就んでいらっしゃる方に比べたらキッチンとした生活します。

「・・・まあ、折角作ってくれたんだし。頂きます・・・」

飛鳥は未だに料理だけは苦手だ。料理だけは。その他家事には定評があるらしいが（母さん曰く

「料理だけって言つたな！自分が一番わかってるんです。」

飛鳥は無い胸を大きく沿つて威張った。

「また何か失礼なこと考えてないかな?た・け・と?」

「いいえ、滅相もありません。」

飛鳥の怖い台詞を軽く流して俺は黒焦げになつたベーコンをほお張る。

絶対油が多いなこれ。

なんだかんだ文句をいいながらも毎回完食してる俺は、結構餌付けされてきているのだろうか・・・色々な意味で。

これもまたいつも日常だつた。こういう会話をしているから、いつも学校ギリギリの時間になつてしまつんだろうな。

・・・。

このタイミングの反省つて9割は反映されないよな。

「あ!もうこんな時間じゃない!武人、早く学校に行かないと遅刻しちゃうよー!」

今日もまた、遅刻ギリギリの登校になつてしまつた。

なんだかんだ言いながら始業の予鈴前に着くことができた。因みに、
俺は飛鳥に車椅子を押してもらっているので楽だったりする。
ト手とはいえ、朝食を作ってくれるだけでなく、
同じ学校のよしみとはいえども毎日学校まで送つてくれる飛鳥には
やはり感謝しなくちやいけない。

教室では、見知った顔が次々に飛鳥へ挨拶の言葉をかける。

それとは逆に、部活もせず、寄り道して帰る友達もいない俺は挨拶すら返して貰えなかつたりする。

みんなが遊びに行く場所は、街中に多く、車椅子だと何かと不便な場所が多いため、誘われてもどうしても躊躇つてしまう。

バリアフリーなんて所詮は表向きで、実際駅に行けばよく分かる。

松葉杖の人気が電車に乗っても優先席はいい年した高校生が音楽を聴きながら氣づかぬふりして座つてている世の中だ。

なによりも

「ういーっす、武人。今日も萌える飛鳥さんと登校とは・・・相変わらず羨ましい奴だぜ。」

「うっす、拓斗、今日も元気だな。」

学校一の変わり者・・・と呼ばれてる神崎拓斗といつも行動していることが大きい要因の一つだらう。

「んで、レモンの話なんだけどよ。」

そう。俺と拓斗はレモンことMMORPG「Le Monde C r e a t i f オンライン」という超人気のネットゲを 版からプレイしている仲だつた。

公式略称は「LMC」なのだが、当時はまだ小学生だった俺達に外国語は読めず、当時習つたばかりのローマ字読みしていた為そう呼んでいた。

その風習もあつてか、一部では俺たちと同じよひでモンと呼んでいるよつだ。

「結局、あのクエストはクリア出来たのか？」

あのクエスト。

それは昨日の夜やつていた、襲われた村の秘宝を魔物から取り返すといつクエストのことだ。

「秘宝は手に入れたんだけど、長老に渡したら、次は港街まで持つていけ……だつてさ。」

「マジかそれ。アレ手に入れるのだけでも大変だつてのにな。」

「ああ。だから、まだ港には言つてないんだよ。今日の夜にでも行く予定！」

「うおーー！話を聞いてると、ますますやりたくなってきたぜーー！俺のパソコンをえ壊れなかつたら……チクショー！」

拓斗のPCはえっちな動画を見よつとしたときにウイルスに感染したらしく、壊れてしまったとか。

その為、拓斗は放課後は毎日のようにバイトしている。

週6でバイトの生活のため、直ぐにお金を貯めてくるのだから……と思つていたのだが。

とある電気街へ向かひと、他のゲームやノベル、グッズに目が言つてしまひじへ、毎回のよつヤマを買い損なつてゐるとか。

「無駄遣いしなかつたら直ぐこでも買えるでしょう、アンタは。」

挨拶が終わつた飛鳥は俺達の話に割り込んでくる。

拓斗は俺の斜め後ろの席で、飛鳥は俺の後ろの席だ。

結局、今日もいつもと同じような話をしていた。

まあ、こんなマニアックな話しか学校でしないから中々友達も出来ないんだろうな。

気がつけば遠くから鐘が聞こえてきた。そろそろホームルームが始まると。

「さて、今日のホームルームを始めたいと想うんだが。」

いつもハキハキしている体育会系の教師が、いつももなく筆つた口調で苦笑いする。

教室にいる生徒も、これは何かあつたな。と空氣的に呑んでいる。

普段は私語が目立つホームルームもやけに静かだ。

「こんな時期に唐突すぎるんだが……実はこのクラスに転校生が

来る」とになつてな。」

・・・。

普段、わざついてこるクラスで有名なクラスらしかなぬ雰囲気に思わず、冷や汗がでやうになる。

なんだこの重い空氣は。

「しかも、彼女は・・・と、血口紹介は自分でしたほうがいいか。入ってきていいぞー。」

どうやら転校生は女の子らしい。男子生徒一同が歓喜に沸きあがつてこる。しかし、女子は女子でじつと教室のドアを見つめている。

転校生にあんまり過度な期待するのは可愛そつな気もあるが。

「し、失礼しますーー！」

ピンクのショートヘアに黄色のカチューシャ。そこにいたのは、誰もが一度は丁々をつければ見たことがあるその人だった。

「川澄沙穂です。お父さんの都合でこちらの高校へ引っ越してきました。これから、どうか宜しくお願ひします。」

「やつぱりサホちゃんなんだつたのかーー！」

「キヤーー。サホちゃんが同じクラスに来りやつたよーー！」

「ブログに引越しするつて書いてあつた、もしかして・・・つて思

つてたけどよ、まさかウチの学校だつたなんて！最高だぜーーー！」

前言撤回。そんな情報が出ていたならあの空氣もうなすける。

そんな彼女、川澄沙穂は、芸能界デビューして3年の人気アイドルだ。歌が上手いコトでも有名で、将来はシンガーソングライターになりたい、と公言しているらしく。

先週の「ミュージックホームズ」という音楽番組を見て初めて知った俺としては、たまたまそのテレビを見ていてよかつたと心から思つ。

流石に知らないなんて言つてしまえば傷つくな。

「席……なんだが、丁度東雲の隣が空いてたよな。そここの席に行つてくれ。」

「あ、はい。」

教室からはブーイングが巻き起つ。空いている席は一番後ろの窓側の席だ。つまり、隣になれるのは俺だけである。

また、その位置だと質問攻めするにも困みづらい筈だ……俺と拓斗が居るからな。

もしかしたら、その辺りを視野に入れて作られていたのかもな……教師、恐ろしい子……いや、本当に恐ろしい先生だ。

「あの、これからよろしくお願ひしますね。」

「ああ、宜しく。」

アイドルと普通に学校で喋ることが出来るなんて特権を得てしまつた。」「れは」「れでラッキーだな。

俺はネットでソヤツてるし、ゲーム大好きだが、あくまで3次元を見ている。こんな展開が嬉しくないワケがない。

「川澄さん、宜しくね。私は成澤飛鳥。飛鳥って気軽によんぐね。」

「はい、飛鳥さん。私も沙穂でいいですよ。」

「え、本当？ それじゃ沙穂って呼ぶわね。」

「はい、飛鳥さん。」

「さん、も悪らないわよ。」

「ふふ、分かりました、飛鳥。」

もとより気恵んでフレンドリイな飛鳥だ。いつ、馴染むのが早いよ
なあ。

「俺は神崎拓斗。ただのヲタだけど宜しくー。」

気軽にヲタをカミングアウトしてる拓斗。周りで聞いている人たち
が蔑むような田でこちら（俺と拓斗）を見ている。

「はい、宜しくお願ひします、神崎くん。実は、私ゲームとか好き
なんで。よかつたら色々教えてくださいね。」

「だが断るッ……」

「おいおい、断っちゃダメだろ。とはいって、それを面白がって笑つて
みている川澄をみてると悪い印象は受けていなによつだ。」

芸能界だから、顔作つてゐるつて可能性のほうが強そうだけだな。

「はい、武人も自己紹介くらいこはれやんとしなよ。」

「え？」

「そうだぞ、隣なんだから、色々と話す機会もあるだらうし、ちや
んと自己紹介くらいはしておいたほうがいいぞ、武人。」

「わかつたよ。」

自己紹介とか、そういうのつて少し苦手なんだよな . . .

まあ2人の言つ「とも」もつともだ。これから円滑に仲良くなるた
めにもキチンとして置かなければ。俺達に対しても対等に接してく
れるようだし。

「俺は東雲武人。改めて宜しく頼むよ。」

「はい、宜しくお願ひします。東雲くん。」

口算と転校生（後書き）

今回はRPGツクールで作つてみようかな、とこうノリで書き始めた。

更新は月3回を目標にしているんだ。

文字数は5000~10000になると想いつ。

もし気に入ってくれたら次回も読みにきてくれると嬉しいよ。

次回、また会いましょう。

学食とこつもの光景（前書き）

初めまして・・・あることは久しぶりかな。

数日更新が遅れてしまつて申し訳ないと思つているよ。

実は・・・今住んでいるアパートの不動産が変わるとかなんとかで、なんと明後日に引っ越しするコトになつてしまつてね。

少し創作活動どころじゃ無かつたんだ。楽しみにしてくれて居た人には本当に申し訳ないことをしたと思つているよ。

それでは、本編の続きを・・・

学食といつもの光景

ホームルームが終わると、クラスメイトは一斉に川澄の元へと駆け込んだ。

転校生の人気は半端ないものだった。

「流石の人気だよな。」

「ああ、聖戦を思い出すぜ。」

神崎も目の前にいるアイドルの人気に拍子抜けしているようだ。

因みに、彼の言ひ聖戦とは「このは完売」というネット流行語を産んだ年に2回程度ある同人誌の販売会場のコトだ。

企業の先行販売などもあるらしく、毎回毎回長蛇の列がで来ているらしい。

「おーい、そろそろ授業を始めるぞー！」

教師の声が聞こえる気がするが、クラスメイトは教師の声なんか聞く耳を持たない。

いつものクラスの雰囲気で少し安心した。え、こんなクラスで大丈夫かって？

大丈夫だ、問題ないだろ？

さて。授業が始まつたのだが。いつもより集中できない。原因はよく分かっているのだが、なんだかなあ。

「もう少し寄せてくれますか?」この奥の写真が見たくて ··· ···

「あ、はいはい。」

聞いた話によると、川澄さんは急な転校だつたらしく、教科書がまだ届かないらしい。

後数日は今のように教科書を見せてあげることになつていているのだが。

周りからの目線が少し痛い。

一つの教科書を2人で見るとこつのはやはり疲れる ··· ··· といふわけではなく、川澄が教科書を覗き込むので、どうしても接近しなくてはいけない。

普段は1人1人の席が空いて離れている教室。しかし、今だけは特別に、と机をくつつける許可を貰っているのだ。

この状態で緊張しない奴は男じゃねえ!そして周りの視線も痛いわ!

2次元に一度猛烈に走つた男でも、実際にそんなシチュウに会えば一瞬で3次元へ戻つてこられるだろう、そうに違いない。

しばらくは授業に集中できそうに無いな、こればっかりはあきらめよつ。

こんな問題を引き起こした張本人はこの視線に気づいていないようだし・・・むしろ慣れているのだろうか。

芸能界つて恐ろしいんだな・・・

そして、長い長い格闘を終えた俺は昼休みへと突入した。

いつも昼休みが待ち遠しいと思っているが、今日ほど待ち遠しいと思つた日はないだろ？

「お勤めご苦労であります。」

拓斗は机にぐつたりとしている俺に敬礼して見せる。

「本当に疲れてる見たいね・・・

飛鳥も『愁傷』と言わんばかりに俺を揉んだ。

俺はまだ死んでないぞー。

「あのー。」

「え、あ。川澄どうした？」

3人でこんなやりとりをしてくるから、輪に入りにくかったのだろう

うか。少し配慮が足りなかつたか。

「お皿を学食で食べたいと思つてゐるんですけど、どうもあるのか分からぬんで、案内してもらえませんか？」

なるほど、そういうことか。川澄は間違ひなく俺のほうを見て頼んでいるのだが。それは無理な相談だつた。

「だつてさ、飛鳥。食堂まで案内してやつてよ。」

「え、なんで私になるのよ。頼まれたのは武人でしょ、自分の責務はキチンと果たしなさい…」

見事なまでの優等生ぶりだ。周りから慕われてるのは、これが飛鳥の本心だからなのは言つまでもない。

しかし、今回に限つてはそれが仇となつたようだ。

「…俺が自由に歩けないコトを一番よく知つてゐるお前がいうなよ。」

「あ・・・」めん。」

「え、自由に歩けないって、どういうことなんですか？」

そういえば、川澄にはまだこの話はしていなかったな。

教室では松葉杖を2本使つてなんとか移動している。そのため、俺の席の後ろに松葉杖が2本転がつてゐるのだが……

まあ、前から入ってきてたし気づかないだらうな。周囲を囲んでた
クラスメイトは普通に松葉杖踏んでたし。

「武人は、小ちこときに事故にあつたらしくてな・・・両足とも満
足に動かせやしないんだよ。」

「え・・・それは本当なんですか？」

川澄は哀れな人を見る目で俺を見つめる。俺が一番困る目だ。

同情なんか要らないし、無理してまで輪に入れようともしなくていい。

ただ、出来る限りで普通に闘つてくれたりそれでいいのにな。

「ま、そんなわけで俺は拓斗に購買で買つてきて貰つているんだ。
飛鳥もいつもは購買だけど、今日は食堂にいけばいいんじゃないのか？」

「わづね・・・それじゃ沙穂、行きましょうか。」

飛鳥が席を立ち、廊下へと移動しようとする。川澄もそれに釣られて席と立ち歩き出す。

アイドルと一緒にメシ・・・なんて都合のいい話。俺に来るわけあるかつての。

「でも、4人で食べたまづが美味しいですし、東雲さんも一緒に行
つてみませんか？」

「えつ。」

次に出てきた一言に俺は驚きを隠せなかつた。手に俺の松葉杖を持つて目の前に突き出していた。

「少し時間が経ち過ぎたな。これじゃ購買言つてもなんも残んねーわ。」

俺が呆然としていると、拓斗が口を開く。

「というわけで、俺も今日は学食にするぜ、お前はどうする?」

拓斗は少しにやけながらこちらを見る。もう答えは分かつてると言わんばかりに。

「分かったよ、んじや4人で学食に行きますかね。」

俺はその松葉杖を受け取りゆっくりと重い重い腰を上げた。

心なしか、拓斗と飛鳥は嬉しそうだった。

学食は混んでいた。いつも混んでいるとは聞いていたのだが。

あの有名な大佐もきっとここにいるだろ？

「人がゴミのようだ」と。

そんなこんなで混んでいたのだが、その全ての人気がこちらを見て静止している。まるで時間が止められているかのようだ。

そして、その沈黙は、奇声によつてかき消された。

「サホちゃんじゃない！？」

「あれ、絶対にサホちゃんだよな！」

「2年のクラスに転入ってマジだったのかよー！」

川澄つて、やっぱり凄い名人なんだよな。こうじて見ても良くわかる。

クラスのあの異常な反応を少し甘く見ていた。

「え、あの。」

「はいはい、皆珍しがらないで道を開けなさいな。」

飛鳥が群がろうとする生徒と川澄の間に立ち、生徒を鎮める。この辺の手際の良さは流石だ。

「いつもの苦労が2倍増しだな。」

「俺を見て言ひなよ . . .」

そう。人が多くて上手く通れない時、いつだって飛鳥は俺の前に立つては道を作っていた。

確かに苦労が2倍増しだな、かたじけない。

「ほり、せつかく道が出来たんだから、ぼさーっとしてないでサッサと行くわよ！」

そんな話をしていると飛鳥が俺たちの前まで来ている。前を見ると、川澄は既に4人席の一つに座っていた。

まだ食券すら買っていないんだけどな . . .

「ま、武人はサホちゃんと座つてお喋りでもしてろよ。お前はA定食でいいよな？」

「え、おこまでって。俺はB定食が . . . じゃなくて、なんで川澄と二人で」

「食券売り場みてみるよ。あの人だからにいきなりサホちゃん連

れていけると思つてゐるのか？」

そうじつて神埼は食券内場を指さす。そこは、まさしく戦場といつ名が相応しい空間となつていた。

川澄の存在にも田をくれず争つその姿はとてもじやない威圧感に覆われている戦士だ。

「食堂がトラウマになりかねんな。」

「だら？それに、お前もその足じやいけないだらうからな。一人で仲良くお留守番。それじゃ行つてくるぜ。」

そういういつの間にか戦場へ向かつた飛鳥に続き神埼も戦場へと足を運んだ。

「あの、あそこは大丈夫なのでしょうか . . . ?」

「大丈夫なら川澄さんも連れていくだらうが。」

「そ、そ�ですね。」

ここから見てもわかる威圧感に流石のアイドルも落ち着かなつようだ。

「無言の時が過ぎる。」ひやつて二人で話すような機会があったところで、話題なんか・・・

「東雲くん。」

「ん?」

「東雲くんは、ゲームとかやる方なんですか?」

あつたよ、話題。

「結構やつてるよ。まあ、この足だから、中々遊びに行つたりとかもないから、テレビゲームとかDSPとかネットくらいだけだ。」

DPSとは、最近有名になってきた携帯ゲーム端末のことだ。町の

至るスポットに専用の通信網が繋がっている。

それに接続することは、大体の場所で通信対戦等が出来る優れものである。

「私も人に見つかるとアレだから、よくゲームとかやつてるんです。
『ぼよぼよ』とか。」

「ああ、『ぼよぼよ』ね。ああいうパズルゲームは一度ハマると大
変だよなー。」

「そうね。友達が『14連鎖できたー!』なんてメール送つてきて
て…」

「15連鎖を目指して特訓中とか?」

「やうなんですよ。なかなか上手く出来なくて」

「や二まで行くと運じゃないか?」

「それもやうなんですが…。どうしても越えたくて。」

「その気持ちはよく分かるよ。」

川澄さんは思つたよりゲームに熱いようだ。

性格も、喋り方は雰囲気とは裏腹に少し負けず嫌いなところもある
ようで親しみが持てた。

「その他に最近やつてるゲームとかあるの?」

「レモンっていうオンラインゲーム……とかやっているんですけど、『存じですか?』

「なんと。俺たちが最近ハマってやっているレモンにまで手を出していくとは。

実はかなりのゲームなのかもしれないな、川澄さんって。

「知ってるも何も……」

「ランカー。だもんな、お前は。」

「え?」

後ろを振り向くとソカツ定食とB定食を持ってきた神崎がいた。

「お前、いつの間にいたんだよ。」

「レモンの話になつて俺が来ないとでも思つてこるのか?」

「じめん俺が悪かつた。」

「えーっと、神崎くんもレモンをやっているんですか?」

「ああ、俺もランカーだからね。」

「因みに、ランカーというのは、LICO公式HPに乗つてているゲームのキャラのランキングのコトだ。」

ランキングにも種類があつて。

レベルのランキング

クエスト達成数のランキング

の2つがある。

神埼はレベルランキングのトップで、俺はクエストランディングのトップだつたりする。

まあ、ずっと同じネトゲに粘着していればこいつなるのもうなずける。

1日にLINEでくる時間に上限があり、さりとて言えば、一日でこなせるクエスト数も決まつていて。

しかも課金はアバターのみなので、経済的にも優しいゲームなのが売りだつたりする。

「そうだつたんだ……私は最近始めたばかりで。これからつて感じなんんですけど……」

「何の話をしてる、武人？」

そこでタイミング悪く飛鳥が帰つてくる。両手に持つていたレディースランチAとBをテーブルに運ぶ。

「えつと……」

俺は川澄の方を見る。川澄は微かに首を振つていた。これは……

言わぬ方がいいんだろうな。」

「IJの学校の印象とか、そんな話だよ。」

「へえー。武人にしては、随分とまともな話へ持つて行ったのねー。
どう、この学校は?」

「は、はい、皆さんとても楽しそうで、いい学校だと思います。」

川澄は俺の方を見ると笑顔で微笑んだ。きっと感謝しているんだろう。
どうやらこの話題ふりで間違つていなかつたようだ。

「へえー。武人にしては、随分とまともに仲良くなってるのねー。
どう、武人は?」

そんなやりとりをしていると、今度はどこか棒読みでさつきと似た
ようで全然違うことを言い放つてくる。

「東雲くんは、とても面白いし、いい人だと思いますよ?」

「ふうーん、いい人ねー。武人がねー。」

飛鳥はどこか不機嫌な様子で俺シド田で見つめてきた。

しかし、その不機嫌も一瞬のコトで、次の瞬間には川澄と仲良く昼
食を食べていた。

．．．何かまづいコトでもしたか?

午後の授業も以下略で、すぐに放課後になつた。少し話をしたからか、妙な緊張は多少は和らいだと思つ。多少は。

俺は一人で事務室へと歩く。階段を下りるまでは一緒にいたのだが飛鳥は今日は部活の日だし神崎はいつもの通りイベントとやらに行くんだと。

事務室へ行く途中に事務室に寄り松葉杖を返す。いつもやつりとももう慣れたものだつた。

「さて、ど。今日はカラオケいこーぜ。」

「えー、今日はボーリングにいこーよ~。」

事務室から車椅子に乗り、校門庭まで出ていくと、そんな会話を耳にした。俺のクラスの連中だつた。

一瞬チラッとこちらを見るがすぐに元の視線に戻す。

彼らは俺を見かなかつたことにして先を歩いていった。

これもいつもの光景だ。

カラオケ屋にしてもボーリング店にしても、エレベーターも無くバリアフリーが漫透していないや時代遅れなこの町に車椅子の居場所は無い。

それは俺自身も知っているし、彼らも知っている。だからお互い見ないふりをしていた。もう、住んでいる次元が違うのだ。

行つてみたい。やつてみたい。そつまつとはあつても、いつも手が届かなくて。

籠の中にいる鳥同然の俺は、クラスメイトに声をかける口さえもできなかつた。・・

学食とこつもの光景（後書き）

希望を信じ仲間と共に歩むMMORPG

Le Monde Creatif

絵が書けたらいいのになー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9030v/>

Le Monde Creatif

2011年10月5日16時16分発行